【書評】

『狂気へのグラデーション』

稲垣智則著，東海大学出版部，2016 年 7 月，348p
ISBN 978-4-486-02113-1
本体 2,400 円＋税

出版社の広告には，「臨床心理士でもある著者が街中で遭遇した出来事を通して，私たちの深層に潜む「狂気」と「正常」の世界などを，著名な心理学者の言葉を引用し，解説する心理学のテキスト」とある。だが本書は堅苦しい教科書的な解説書のイメージからは程遠く，むしろ，人間関係論のエッセイというべきものである。図書館での分類は 140.4（心理学分野の評論集）で，こちらが近い。あとがきには「結局，「人を愛せないこと」が狂気であると，私は考えているようだった」とある。「人を正しく愛すること」が本書のテーマであり，サブタイトルを与えるならば，「愛する力の不足について」とでもなろうか。

本書の構成は次のとおりである。序　狂気について／一　ヒトとモノ／二　恋愛について／三　愛すること／四　話を聴くこと／五　共感について／六　思い込みについて／七　仕事について／目減りするものと増えていくもの／付録。

考察対象ないし説明の素材となる事例は，たとえば，人気漫画の『ジョジョの奇妙な冒険』が好きな男性と嫌いな女性とが付き合えるかなど，若者にとって身近な出来事，最近の話題が多い。他方，幸田露伴の幸福三説（惜福，分福，植福）など古典的な道徳論にも言が及ぶ。想定読者層であろう二十歳前後の学生にとっても，バランスの良い豊富な論点を含んだ読本である。

多くのカウンセリング経験と深い自己省察から導出された人間の深層心理への洞察は，読み手にある種の緊張を強いる。それは，自分を「醜い人間」の一員として，あるいはその代表として見る勇気が求められるからだ。「しかし，それも人間。それが人間。それを誤魔化さずに受け入れるのが，人を正しく愛する力を育む第一歩」ということだろう。

本書の論点にさらに加えて頂きたいと思うのは，ある人物の特定の行動の背後にある原因について，その分析が的を射たものであるにしても，それを他の人物のあらゆる行動の原因と同質だと簡単に結びつけない，一般化を自制する思考を養うことだ。ヴィクトール・フランクルの言葉を使えば，「心理学主義」を克服し，「本当に人間的な次元での動機からなされるもの（例えば善意の行動）を，人間以下の次元（実は称賛を浴びたかったから，など）に引き下げて解釈することを常としない」ことである。善意と虚栄や不安は，確かに混ざり合っていることが多いが，常にではない。純粋な善意の表出を，常に何か別の欲望的なものの裏返しとして見ようとする思考に慣れてしまうと，本当の人間性を見失い，人間への失望を招く恐れがある。

本書のテーマは「人を正しく愛すること」である。本書は，日常にメスを入れるような鋭い分析の観点を提示するが，それは本当に人間らしい価値を，別のものの産物として暴き切り刻むためではなく，不可逆に進行する限りある「人の一生」のなかで，本当に人間らしい価値をより多く引き出すための道具として使われるべきものである。

なお，付録の「アウトサイダーについて」の見解は，世界の宗教対立を調停しうる思考基盤になりうる議論で，比較宗教倫理の観点からも注目に値する。

付記：本書は平成二十九年度江戸川学園取手高等学校入学試験問題「国語」の読解文として引用された。

（評者：竹之内 禎）